

忠孝類說
附稱呼辨
全

仁
1.187



門口 巳
號 1187
卷

絅齋先生遺稿

忠孝類說

附稱呼辨

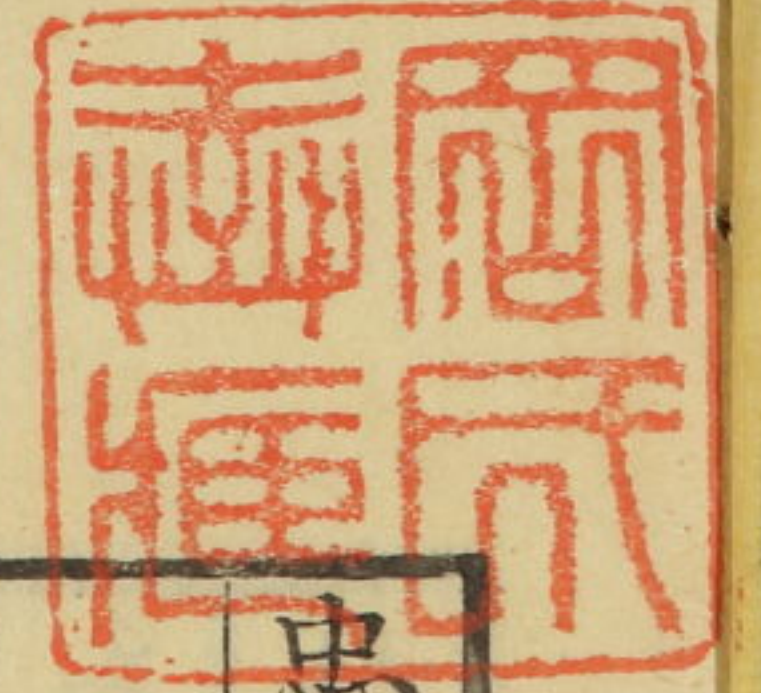
湖南 三書堂梓

忠孝類說

絅齋淺見先生遺稿

松田左馬助

天正十八年、秀吉小田原北条の城を攻圍する、松田尾張守を
代へ北条が長良とて、其勢五千有餘、威蓋八州、富甚、洋溢
子も多うとて、長子益原新六郎ハ國器の才あり、二男松田左
馬助ハ忠義の志篤く、三男孫三郎ハ学道曉く、左馬助容顔
美麗世子、ヤサ心も優ヤサ艶ヤサ、ヤサ、ヤサ、ヤサ、氏直側近、愛し侍
りき、然る間今以て本丸に在て、父の方ハ偶あり、松田おもふ



やうに當家滅亡のとき至りぬると覺るころに、數ヶ所乃城々
を關白殿の屬に奉り、いま小田原一城に迫り、一ヶ落城
幾程あるべし、其上秀吉公の計策に欺子房、武勇、韓信程
の名將おれども、中々運をひらくべき行も思ひ絶し、我一人
義を守りても其詮あるべし、堀久太郎方へより、秀吉
公へ降てとむと思慮し、六月八日その有増使札を以て申入
志うば、久太郎則其旨伺ひ申されば、おと天乃與ふ所の幸
あり、然るよおきて、伊豆相摸永代可宛行の旨、よき
計ひ可申由かるより、返簡におよびぬ。

芳簡并使者口上之趣、即殿下に令披寫處
に忠節之悦思召、然る伊豆相摸永代可
に扶助者、孫に極法分別、重而整紙ホキ、
委沙汰、而頓可、作裁、恐惶謹言、

六月八日

このごとく互の名字かゝりあり

松田返章を令披見安堵の思ひをか、翌朝二男左馬助
を本城より呼寄、密に云、今、近來氏政氏直某に對し、
さしたる義も、つゝ、甚以て浅う、さるや、

申掛られ候ひつるこゝ内、其方も存知る義も候然れども、不得時して憤りを押さぬ過来り、然る間逆意を思ひ立の条同心き、我鬱憤を散り呉ふこと頼こける、左馬助涙をもちくと流し申さるや、御身と北条家代々長臣として、莫大の地を領し、政道をも掌玉ひ一門一族其澤を蒙り、こと、関八州におあり隠れおとし、まぎれ候假令無據御恨つるといふとも、此節ハ全く義よりらざる所あり、願くば思召留りても可然候らむと諫し、尾張守、面目もあき次第、滅し言の葉もあきぞ、此上を自

害をむより外なきとして、服差し手をかり、処を、左馬助おさへ、夫程よ思召入給ひあむ、不及是非同心申候条、御心を安どおしませと、十四日迄を其義と同しけり、痛も、や左馬助、此義も同しぬれば、主君への不忠同せられば、則ち父への不孝とや為む、やうも、身もがなふると、昼夜思ひ煩ひ、形勢を、尾張守も不審よ思ひきり、同月十日の晩、長子笠原新六郎、二男松田左馬助、三男禪三郎、内藤左近太夫、太田肥後守、二資應、よきりて、数寄屋へ呼入れ、茶を沙汰し、其後、この座中何れも、遙きぞ、心中と見及ぬれば、

一入頼母敷おもふありと、事^トづ^レ〜^トもさまりいひ出ぬ、^コも
ねかて各々、出れい^ウなる事^ニ斯^カハ被申^スる^{コト}もおもふ處^ニ
い^ハぢ^キも紫^トて見候へ此^ノ籠城^ノ為^ニ躰^ニ三日^ハ出^サず^ルもと思
ふあり、其子細^ハ成田下總守^ガ擧^マ動^マその外^ニ歴^クる者^共、^ニお
おの^ノ身^ノ上^ニ乃^チ美^ヲを專^ラり、上下^ノ心^各隔^マる^{コト}へ侍^リぬ、これ^ハ
搦手^ノ大将^{羽柴}下總守^{利家}、謀計^ヲを以て數ヶ所^ノ城主^ト秀
吉^公乃^チ幕下^ノ小属[、]武勇^ノ功^ヲを勵^マり、八王寺^ノ城^ヲを攻平^メ
故^レいま^ニ當城^涸魚^ノ体^ニ異^{コト}あり、籠城^ノ面^ニ狐疑^シ
乃^チ心^甚蜂起^シ、當家^滅亡^ノ思^乃外^急あり、^一某^{一人}忠義^ヲ

守^リ、一門^{一族}ノ父母^{妻子}共^ト、一時^ニ亡^キむ^{コト}と^モ口^惜所^詮
逆意^ヲを企^テ彼等^ヲを救^ヒむ^{コト}と思^ハなり、明夜^長圍^越中^守
池田三左^工門^尉堀久^{太郎}勢^ヲを某^ガ丸^へ可^キ引^入の行^リ究^ム
めたる^{コト}、皆^クその心得^ヲを介^シ候^ヘとあり、左馬^助十五日^ノ
夜^ヲを延^シ、申^度おもひ^シ此^ノ事^ハ、めて終^ト合^テり、一日^ハ
日、明日^もま^だ不^成就^日とてお^ハり、^一候^願く^バ明夜^ハ御
延^テりて宜^シ、^一やと諫^シ、^一ば尾州^{同心}、十七日^ノ夜
もぞ極^メける、左馬^助役^所を肝^要ある丸^おれ^バ歸^ス、^一と
も、此^ノ者^ノ心^ハ忠義^ふ、^一故^何方^へも出^さる^{コト}、^一番^乃

者共を多く付て遣ハシ、左馬助具足甲本丸に有りと
取遣ハシ、けしは来りぬ、即ちその具足櫃に入代りて、十四日
の亥刻に本丸へ忍び入、氏政氏直に申上ぬる中、八尾張守の
命を某に可被下におかす、ハ大事の義を知らまはらせ候へ
と、怪くそ乃約束を申定め、斯て叫きくる、父逆意を企申
候、事急可有御座る、条明朝是へ被召寄可然候とんやと
て、まゝおの役所へ帰りよけり、氏政より十五日の朝尾張
守方へ可致登城之旨使者と立り、頓て参り、北条
陸奥守并江雪斎と使者より、敵方より其方事、逆心

と思ひ立、長岡池田堀彼等三人が勢を、汝が丸へ明後十七
日の夜引入、某父子に切腹させむと有之由、内通有之候
か、それハ何故かと思ひ立、ぞと尋らば、一時答申様
を、其古く、武田信玄、當城へ働き申けるとき、これ逆意
を企、信玄と入塊有之、敵方より間者を入、密にい
せつるを突と思、召、某人質を召置候ひき、其節もい
さう存寄ざる事候て、今以て間者の云為ふる、と
申候とも、いや今度ハ左馬助忠義を正し知らせたるぞと、
重て両使申せしより、松田心伏を、城中其外役所より乃

死き久し七月八日、医師安清軒に移り、浮世の日数迫りき
 て、時をまつ所りさま、物よ裁て哀もあがり、関白殿仰らるる
 も、北条家を可打果、とせりて所りぞり、然るも氏政以下悉
 く助あげ、無ての言葉も空敷に似たり、氏政氏照を切
 腹させ、氏直兄弟ハ可相助、旨、徳川公へ御相談ありませむ、
 尤宜き御事と奉存候由も、檢使とぞ定めらるる、然るに
 ろり十日の晩、石川備前守、蔭田權助、中江式部大輔、佐々淡
 路守、堀田若狭守、徳川公より、榊原式部大輔、檢使として安
 清軒が宅に來り、その有増と言出むも、痛はしく思ひ侍り

一 体を、氏照推察せしめ、行水の暇を芳情をまといわれし
 ば、いづれも緩くと御文あとも調らる候やうも、何も申
 けふ、あがり 如斯侍りて切腹の形勢さし、北条家代々相
 續有しき、しるかと思ひ、殊勝も思ひ、さし誰も
 衰よあむむと、兼て去りしものよをわれと、銘心腑せ
 り、兩人の面を秀吉公へ、徳川公御持參ありし、バ、不恐天
 命もの、支なれば、洛乃戻橋より置可申旨、石田治部少
 輔に被仰付よけり、小田原の城を請とせ玉ふ人より、本
 多中務大輔、井伊兵部少輔、榊原式部大輔あり、りて同

廿日、氏直高野山に登り、可被申旨に依て、供侍る人、一門に北条美濃守、同左工門、佐家老、松田左馬助、大道寺孫九郎、内藤左近太夫、并豫左兵工尉、余田大膳亮、近侍乃その共三十人、并下く三百人、道の賄并、警固等に至るまで、無残に被仰付候あり、太閤

左馬助之志固可哀矣、其告于氏直、以不得已之舉、不為過焉、唐李瓘是已、但李瓘聞其父死、即自殺、松田則不死于諫、其父之時、又不死于告、父謀逆之時、又不死于

其父被誅之時、又不死于城陷之時、徒從氏直降敵、獻城、以令氏政兄弟至死、終登高野山、以保遺息、此可恨也、或謂是時左馬助年甚少、以此議之、過矣、然左馬助以年甚少、志節之可觀、既如此、則責備之義固不容已焉、

唐李瓘

唐朱泚反、圍德宗于奉天、李懷光帥衆入援、奉

天圍解德宗以懷光子瓘為監察御史詔懷光
取長安懷光屯兵不進瓘密言於德宗曰臣父
必負陛下願早為之備臣聞君父一也但今日
陛下未能誅臣父而臣父足以危陛下故不忍
不言德宗驚曰卿大臣愛子當為朕委曲弭縫
之對曰臣父非不愛臣臣非不愛其父與宗族
也顧臣力竭不能迴耳德宗曰然則卿以何策
自免對曰臣父敗則臣與之俱死復有何策哉
使臣賣父求生陛下必安用之懷光遂反德宗

奔梁州及李泌赴陝德宗謂之曰朕所以欲全
懷光誠惜瓘也卿至陝試為朕招之對曰陛下
誅幸梁州懷光猶可降也今雖請降臣不敢受
況招之子瓘固賢者必與父俱死矣若其不死
則亦無足貴也及懷光死瓘亦自殺綱通鑿目
胡寅曰嗟乎李瓘之死也知父非義說之而
弗從知君之不可背欲事之而不可得德宗
既欲全之則宜預詔馬燧以懷光叛逆罪止
其身念嘗勤王特宥其子使懷光父子知之

則懷光必使_レ瓘勿_レ死_ニ而瓘亦可以_レ不_レ死_ニ矣、
胡氏之論誠善然竊謂使_レ德宗有_レ此詔而
為_レ瓘者無_レ可_レ生_ニ之理矣、

石堂右馬頭

故新田左中將義貞ノ次男左兵衛佐義與三男少將義宗、
從父兄身左工門佐義治、三人武藏上野、信濃、越後ノ間
ニ在所ヲ定メズ身ヲカクシテ、時ヲ得バ義兵ヲ與サント、
企_ダ居タリケル処へ吉野殿イマダ住吉ニ御座アリシトキ、

由良新左工門入道信阿ヲ勅使ニテ、南方ト義詮ト御合休
ノ事ハ暫時ノ智謀ナリト聞ユル処ナリ、仍_ッテ節ニ迷ヒトキ
ヲ過スベカラズ早ク義兵ヲ起シテ將軍ヲ追討シ宸襟ヲ
休メ奉ルベシトゾ被仰下ケル、信阿急ギ東国ニ下ツテ、二人ノ
人々ニ逢テ、其ノ子細ヲ觸ケル間、然ラバヤガテ勢ヲ相催セ
トテ、廻々ヲ以テ東ハケ国ヲ觸廻ルニ、同心ノ一族八百人ニ
及ヘリ、中ニモ石堂四郎入道ハ、近年高倉殿ニ属シテ薩埵
山ノ合戦ニウチ負テ、魚甲斐命ハカリヲ助ケラレ、鎌倉ニア
リケルガ、大將ニ憑タル、高倉禪門ハ毒害セラレ又、我トハ事

ヲ不起得、アハレ謀叛ヲ起ス人ノアレカシ、與カセトオモヒ
ケル如ニ、新田左兵衛佐、同少將ノ許ヨリ、内状ヲ通シテ、莫
ノ由ヲ知ラセタリケレバ、流ニ棹ト悦デ、ヤガテ同心シテ、ケリ
マタ三浦、小葦名判官、二階堂下野二郎、小俣宮内少輔
モ、高倉殿方ニテ、薩埵山ノ合戦ニ打負シカバ、降人ニナ
リテ命ヲバ継タシ、氏人ノ見ル如ク惜キモノ哉、アハレ謀叛
ヲ起サバヤト思ヒケル如ニ、新田武藏守、同左五門佐ノ方
ヨリ、憑ミ思フヨシヲ申タリケレバ、願フ如ク幸ヒ哉トヨロ
コシテ、則與カシテ、此人ノ密ニ弱谷ニ寄合テ、評定シケ

ルハ、新田ノ人々旗ヲ舉テ上野国ニ起リ、武藏国ヘウチ
越ケルト聞エシカバ、將軍ハ定メテ、鎌倉ニテハヨモ待玉
ハ、關戸入間ノ辺ニ出合テゾ、防ギ玉ハ、ズラシ、我等五
六人ガ勢、何ホドナクトモ、三千騎ハアララズラシ、將軍戰
場ニ打出玉ハ、ズル時、態ト馬廻リニ扣ヘテ、合戦已ニ半バ
ナラズル最中、將軍ヲ真中ニ取コメ奉リ、一人モ不殘
打取テ後ニ、御陣ヘ参ルベシト、新田ノ人々ノ方ヘ相圖ヲ
堅ク定テ、石堂入道、三浦、小俣、葦名ハ、働カテ、鎌倉ニ
コソ居タリケル、諸方ノ相圖、定リケレバ、新田武藏守

義宗、左工門、佐義治、閏二月八日、先手勢八百余騎ニテ、西上野ニ打出ル。是ヲ聞テ、国々ヨリ馳参リケル。當家他門ノ人々、都合其勢十萬余騎、所々ニ火ヲカケテ、武藏国ヘ打越ル。將軍是ヲ聞テ、鎌倉ヲ打出テ、敵ヲ道ニ待テ、戦ヲ決セシトテ、十六日ノ早旦、僅ニ五百余騎ノ勢ヲ率ニ、敵ノ行アハズル処マデト、武藏国ヘ下リタマフ。鎌倉ヨリ追付奉ル人々、都合其勢八萬余騎、將軍ノ御陣ヘ馳参ル。ステニ明日矢合セト定メラレタリケル夜、石堂四郎入道、三浦友房呼ケテ宣ケルハ、合戦已ニ明日ト定メラレタリ。コノ間相謀

リツル。友房、子息ニテ候右馬頭ニ、曾テ知ラセ候ハヌ間、此者一定一人残り止ツテ、將軍ニ討シ進ラセント覺ヘ候。一家ノ中ヲ引分テ、義率ニ與シ、老年ノ頭ニ曾ヲ戴クモ、若望ミ達セバ、後榮ヲ子孫ニ残サント存ル故ナリ。然レバ此友房告知ラセテ心得サセバヤト存ズルハ、イカニ候ベキト問玉ヒケル。三浦実ニモ是程ノ友房、告進セラレザランハ、可有後悔オボエ候。急ニ知ラセ進セラレ玉ヘト申ケル間、石堂禪門、子息右馬頭ヲ呼テ、我薩埵山ノ合戦ニ打負テ、今降人ノ如クナレバ仁木細川等ニ押ヘラレテ、人数ナラヌ有様、御辺モ定メテ

遺恨ニッ思フラン、明日ノ合戦ニ、三浦、久葦名、判官、二階堂ノ人ト引合テ、合戦最中、將軍ヲ討奉リ、家運ヲ一戦ノ間ニ發カント思フナリ、相搦エテ、其旨ヲ心得テ、我旗ノ趣クニ可被順ト云レケレバ、右馬頭大ニ気色ヲ損ジテ、弓矢ノ道ニツアルヲ以テ耻トス人ノ責ハシラズ、某ニオ井テハ、將軍ニ深ク憑レ進ラセタル身ニテ候ヘバ、ウレ口矢射テ、名ヲ後代ニ失ハントハ、得コソ申マシケレ、兄弟父子ノ合戦古シヘヨリ、今ニイタルマデ、無キコトニテ候ハズ、何サマ三浦、久葦名、判官、隱謀ノ責ヲ、將軍ニ告申サズバ、大キナル不忠ナル

ベシ、父子ノ恩義ステニ絶候ヒヌル上ハ、今生ノ見恭ハ、コレヲ限リト思召候ヘト、顔ヲ赤ラメ、腹ヲ立テ、將軍ノ御陣ヘグ被忝ケル、父ノ禅門大ニ與ヲ醒シテ、三浦ガモトニ行テ、父ノ子ヲ思フ如ク、子ハ父ヲ思ハヌ者ニテ候ナリ、此コト右馬頭ニ知ラサズバ、敵ノ中ニ残りテ、討レモヤ為ニズラントオモフ悲シサニ、告シラセテ候ヘバ、以ノ外ニ気色ヲ損ジテ、此事、將軍ニ告申サデハ、叶フマシキト申、飯リ候ヒツレバ、イカサマ此者ガ気色、ヨモ告申サヌ責ハ候ハジ、イカサマヤガテ討手ヲ向ラレント覺ヘ候、イザ、セタマヘ、今夜我等ガ勢

ヲ引合セテ、関戸ヨリ武藏野へ向ヒテ、新田ノ人ト一處ニ
ナリ、明日ノ合戦ヲ致シ候ハント宣ケレバ、多日ノ謀ヲチ
ニ顯シテ、カヘリテ身ノ禍ヒナリヌト恐怖シテ、三浦、葦名、
二階堂、手勢三千騎ヲ引分寄手ノ勢ニ加ラシト、関戸ヲ
廻リテ落テ行、太平記

右馬頭ト可謂純乎所事者也、然其父有
方謀弑逆之舉、召其子告之、為子者、當潛
肝敷腸、反復規諫、死于言下可也、以其謀
告于主、與父同生死可也、今乃如路人於

路人、不有一言、以諫之、直去、不顧、以濟父
之惡、此豈忠臣孝子之所為哉、况高氏固
為無君之賊、而薩埵山之戰、弟兄相鬪、皆
非可仕之主、而及直義、遇毒殺、又降于高
氏、為之臣、右馬頭當是時、未嘗一言斥其
父黨、惡忘義之為耻、而至此區區、欲以奉
高氏、逆威為忠、豈不昧于大義之甚邪、
或傳云、大藏右馬頭ハ父ガ此、莫ヲ語リケレバ、思ヒ留
リ玉ヘト、諫言ヲ成シケレバ、独リ思ヒ立タルニモアラ

ズ、同意ノ人々、何トテ思ヒ留ルベキゾト申ノ間、荒ケ
ナク申テ、ヤガテ將軍ノ御陣ニ参リ、御傍ノ人々ヲ
除サセ玉ヘ、直ニ申入ルベキ旨ノ候ト申ス、將軍傍ノ
人ヲノカセ、大藏右馬權頭ヲ召シケルニ、大藏ナミダ
ヲハラハラトナガシテ申候ハ、此、豈隠シテ申サレトス
レバ、御一家ノ御滅亡、又申サンニハ不孝ノ罪アリ、兎
角ノ望候ヲ、叶ヘ玉ハラントノ仰、兼リ度コトニ社トテ、
シカビカト語ル、將軍大キニアキレサセ玉ヒケレバ、望
ト申ハ此ニテ候、親父入道ガ命ノ替リニ、某ガ首ヲ召

シ、入道ガ一命ヲ御扶ケニ預ラバヤト申ケレバ、將軍泪
ヲナガシ玉ヒテ、傍ノ忠義ハ當家子孫ニ至ルマデ、ワ
スル、コアル間敷ケレバ、入道ノ命ノ豈、誠ニ惡シトハ
思ヒナガラ、今ノ志ノ義ニ當リテ、ヤサシク覺ルウヘハ、
貴辺ニ参ラセ候ベシ、其時所知ノ豈共申付ベキニテ候、
只今討手ヲ遣ハスベシ、入道ノ陣ヘハ討手ヲ遣スマジ、
三浦ノ者討取ナバ、入道ハ先何方ヘモ落スカ、マタハ貴
辺、其心得アラシ候ヘト宣ヘバ、大藏実ニ嬉シサ、忝サニ
深クノ泪ヲグ流シケリ、高氏仁木義長ヲ被召、コノ

史仰セケレバ、義長則時ヲ不替、討手ヲ遣ハシケルニ、
早落^チ失^セテ、陣^ノニハ人ナシトニヤ、其後大藏義長ヲ以
テ申ケルハ、上ノ御腹イサセ玉フコトハ侍ルマジケレバ、
某腹ヲ仕ラシト申ケレド、將軍アルベクモナシトテ留
玉ヒシ、武藏野ノ軍ニ打勝玉ヒテ、天下將軍ノ御代
トナリシニモ、此入道一命恙^ツナク、数年ヲ送り、大藏
モ、隱居ノ御分トテ、所領餘多ワケウカハシテケレバ、
何ノ不足モナカリシトニヤ、

按^ス如此所傳則右馬頭存君全父竭^ク力^ヲ稱

縫^ス亦可^レ謂^フ能^ク處^ス矣、但昧^キ於大義之責終不
可^ク逃^ル則是^レ古問^フ無^キ齒^ノ決^シ之比耳、嗚呼惜哉、

漢王陵

漢王陵者、故沛人、高祖微時、兄事^ス陵、及高祖起
沛、陵亦自聚^ル黨^ヲ數千人、及高祖還、攻項藉、陵乃
以兵屬^ス漢、藉取^テ陵母置^キ軍中、陵使至、則東嚮、坐
陵母、欲以招^テ陵、陵母既私送^リ使者、泣曰、為^シ老妾
語^ル、陵謹事^ス漢王、漢王長者也、無^キ以^テ老妾故^ヲ持^リ、二

心妾以死送使者遂伏劍而死藉怒烹陵母陵
卒從高祖定天下史記

楊維禎曰陵歸漢不先為母地而為藉所持
既死又附諸鼎鑊亦何以有吾之膚髮哉移
其報母者報漢卒從漢定天下為漢相國太
后欲王諸呂陵獨持正論其去相權謝病死
亦無負于漢矣無負于漢是無負于母矣然
終天之痛雖伊呂之功何益哉君子曰謝病
死孰愈謝母以死

余謂陵有可先為母地者而不為固不可
若使當時既為其地而顛沛錯迂母遂為
藉獲則陵之不幸亦無奈何但陵母之志
特在乎識漢王長者而望其子顯達而已
則陵身降而母存為之可也然陵使方至
其母即以死送陵而藉遂烹之則陵終從
漢王以滅藉此乃所以報其不共戴天之
讐而其後相漢功業可觀亦非可已而不
已者則本末蓋無可議者楊氏似議陵但

計後功不以死謝母于當日則過矣

漢趙苞

漢靈帝熹平六年鮮卑寇遼西太守趙苞破之
遼西太守趙苞到官遣吏迎母道經柳城值鮮
卑萬余人入塞寇鈔劫質苞母載以擊郡苞出
戰對陣賊出母示苞苞悲號謂母曰為子無狀
欲以微祿奉艱朝夕不圖為母作禍昔為母子
今為王臣義不得顧私恩毀忠節唯當萬死無

以塞罪母遙謂曰人各有命何得相顧以虧忠
義爾其勉之苞即時進戰賊悉摧破其母為賊
所害苞歸葬訖謂鄉人曰食祿而避難非忠也
殺母以全義非孝也如是有何面目立於天下
遂歐血而死綱目

尹起莘曰趙苞急於王事遂至不能全其母
故雖歐血而死綱目忘畧而不書所以權輕
重而示訓也嗚呼微矣

竊謂綱目直書太守趙苞破之正所以著

其職守之績歐血而死乃為其母非死主
事也故目不書死之耳尹氏之論未當
程子曰以君城降賊而求生其母固不可矣
然當求所以生母之方奈何不顧而遽戰
乎必不得已身往降之可也徐庶得之矣
竊謂苞或有生其母之道遽戰而不顧固
非也若使當時千思萬策既無生母之方
而令所守之城由己以陷則雖使母命克
全亦何贖不忠不職之罪哉或有身降而

城全之謀則徐庶可為焉但虜之質其母
本為得其城而非欲獲趙苞也恐令苞徒
束身特降則虜必不肯聽亦所宜審焉大
抵論者專以濟親死為要義是固然然夫
母獨非人類哉若惟以不忠不義望活其
命是不以人類待吾親也可乎此皆非私
論實亦本程子說許友以死者推之姑俟
明者正焉方孝孺有趙苞論要不出于程子故不載之
補或問使孔子遇害顏子死之否乎程子

曰豈特顏子之於孔子也若二人同行遇難固可相死也又問親在則如之何曰且譬如二人捕虎一人力盡一人須當同去用力如執干戈衛社稷到急處便遁逃去之言我有親是大不義也當此時豈問有親無親但當預先謂吾有親不可行則止豈到臨時却自竄避也且如常人為不可獨行也須結伴而出至如親在為親圖艱須出去亦須結伴同去便有患難相死之

道昔有二人同在嵩山同出就店飲酒一人大醉卧在地下夜深歸不得一人又無力扶持尋常曠野中有虎豹盜賊此人遂只在傍直守到曉不成不顧了自歸也此義理所當然者也禮言親在不許友以死者此言亦在人用得盖有親在可許友以死者有親不在不可許友以死者可許友以死如二人同行之類是也不可許友以死如戰國游俠為親不在乃為人復讐甚

非理也遺書

潁川徐庶

蜀先主劉備屯新野潁川徐庶見先主先主器
之後從先主南行為曹操追破操獲庶母庶辭
先主而指其心曰本欲與將軍共圖王霸之業
者以此方寸之地也今已失老母方寸亂矣無
益於事請從此別遂詣操注引魏略曰庶至魏
黃初中至右中郎將御史中丞後數年病卒蜀志

余謂徐庶於劉備固無方面專任之責而
君臣之分亦未定不得已詣操則終身遵
濱躬耕與母沒可也至魏之後遂受其官
非也

免受兄弟

天正十一年賤ヶ嶽の軍敗也秀吉乃勢惣懸りよめり
しうば佐久間玄蕃允が勢惣敗軍りありしとき柴田修
理亮勝家小姓馬廻り其勢七千余騎堀久太郎が要

害、東野と押へて對陣せりあり、玄蕃允勝に乗ら引くら
 ざるを悔み怒り、急ぐ引取候へし、使者敷波を立て言
 遣りし、うごも用ひざりし、其道に闇きものありと、
 散る小言り、腹立して在り、処に、按の如く夜半の頃より、
 四方物騒し、ありいで、何ともあふひそめきありぬ、れ
 といさま、不可然事ありと、家老共勝家の陣に
 つまりし、玄蕃の不引取、支ふ付、千非を悔む所、
 いまご其舌も乾きざる、小秀吉前夕夜通し、多勢を卒
 し、濃州よりいさ、出の表今曉着陣の、何方ともあ

く沙汰しけし、軍中雜説をいひ、爰もかしくも以の外
 騒ぎ出、怯弱ある者共々、多く頓病虚病、言寄夜乃
 間、落しもあり、悉く色を失ひ度、迷ふ体、をまぐ
 しき、支はらんとし、思ふ處、余吾の湖辺に當りて、銃
 炮の音、支々敷鳴い、どよみあへる声、駭し、弥陣中危うら
 むと急ふあり、あつとを吞で有り、折節、水野小右衛門尉
 が飛脚来て、玄蕃今曉賤ヶ嶽より退候へば、歎むこと付
 て危く見へ候といひ、うらば、勝家聞もあへば、左も右もあ
 らせしと思ひつ、任他我是、一合戦さきと、勢を備

へ待も多かり痛がりや匠作心を到り勇れども西の方玄
 蕃兄弟が勢敗軍におらば藤次もあきとていふく
 さむで衆を励せども旗本の勢もまじつ減るるも
 なく僅一千討り成りうば此勢にて勝り乗たる多勢
 小向をむくといふあむと長ども申せしを修理亮
 合戦の慣ハ左をあきものぞ千討りして心と一致
 小一十死一生の極め合戦及ぶ時ハ勝ものあり我
 任せよと勇れけれども各々尤ありと受ぬ貞ざりか
 三毛受勝ぬその趣を見柴田く申するハ御意の上と

かく申し相似候へども其を昔尾州におおて度々
 軍におもて下りつゝ持玉ひりて因て其御働も
 有しぞあり今度ハ見逃聞逃し数度逢する下りて
 おり候由へ遇半落失ぬ昨日より思召あり一更
 と先手のものども不致もまじ下り如此落散しゆか
 極運の志あり眼前の候是にて云甲斐あき討死を
 ふさむ名も知らぬ者の手く掛り玉も後代まで口
 惜るるべし願くば北之庄へ御歸城あき御心志つら
 小御自害候へ某御馬印と受取奉り御名代は是小

了討死をいへ候べし其隙に急ぎ御歸城をされ候へ斯申上候支も、どうも思召候べし見るどうも、徒らにふるべし覺奉ると急ぎ諫へば、さしづが其道に得る家勝家あれば、尤ありとて、五幣を勝助に渡し、心ある者を毛受し、與せよといひ、さして、鎧を合せ退しあり、勝助五幣を受とり、我手の者三百余人、其外勝家の小性馬廻り少々、左右小隨へ原彦次郎の居るも、要害幸ひ、あきしうむ、是れ取入老母妻子の形見の物を、旧功のゆゑ小渡し遣はし、斯て盃を出し、樽数多取散し、それ

そむといひ、さしづが土器をとり酌たりけし、追行兵ども、柴田が馬印とて、是れ修理亮とぞ、扱ふまじ、おけをわし、追行勢と制し止るも、遇半せし、勝家と討取名と天下に揚んと、男もありて、さしづと取巻し、処し、勝助名乗り、さしづ、天下に隠し、さしづ、鬼柴田と云れ、を吾ありとて、さしづを拂て突て出されば、二町余り、さしづひ、さしづ、斯る如く、兄の毛受茂左衛門尉殿とて、有らば、此由を写て、さしづ、身と一所に討死せんと思ひ、向ひ、さしづ、敵を追捕ひ来り、と、勝助うれし、げ、逢つ、敵ひ云

々々御心ざり返りても忝奉存候去らるる数多討
 死とげ候とも此極運といふぞる救ひ玉むや貴方ハ老母への孝
 行の御退りて撫育し玉へよ左もあらば弥御恩賞深
 うるべき旨手と摺て詫けまば孝行といひし事尤其理
 もきこつてはさきども其方と見捨れば汚名世と共り
 有らむ其上老母も其方存知のどとく義理を好きたま
 へり義理を捨て退り母の心小も違むらうぞ義を汚
 さむやとて兄弟も小忠死を極うらハ異朝ハ高祖
 乃臣紀信吾朝にてハ義経の臣佐藤兄弟等あるべし

類ひまゝもき事ども那り新し手を入替り攻入んと再
 三為るる兄弟其外、歴々のものども多くありて突りけ
 突退息もさせ戦ひしうども或ハ手負或を討と残
 王少ふありまけ王勝助兄弟主君勝家退王ふて一時は
 何乃王ぬべし心易く退玉ひまきいざ心もく最期の合戦
 して腹切むと云まゝに残りたる兵十余人引つきて突て
 出散々相戦ひ追散し其後兄弟腹をぞ切たりける
 其身ハ柳ヶ瀬の流に沈むといへども名を高峯の雲と
 立上り在令天晴剉の者ありと其頃を市登孩童ま

でも口はささげり、

嗚呼毛受兄弟其可謂忠孝義烈之士矣、
若使當時茂左衛門逃死而歸則以不忠
之餘軀艱其母而母亦被不忠之汙也、然
則兄弟同死以成吾親好義之美而令其
母不得艱而沒、亦將為忠義之鬼無憾乎
九泉焉、則其亦可謂識其大者而善處者
矣、或曰謝枋得何以為母在而不死、曰枋
得安仁戰敗之後自逸山中、宋亡不仕元

母故尚得以養母而不害於忠孝之全也、
如毛受身方當歎拒鋒忠死之義決于當
日固不得以母在遺生也、

源義朝

保元ノ軍敗レテ後、為義法師ガ頸ヲ可刎由、左馬頭ニ被
宣下ケレバ可宥置旨ヤウクニ兩度マデ被奏聞ケレバ、主上
逆鱗有テ、清盛伯父ヲ誅ス、何ゾ緩急セシメン、甥ハナヲ子
ノ如シト云ヘリ、伯父豈父ニ異ナランヤ、速カニ可誅戮若猶令

違背ハ清盛以下ノ武士ニ可被仰付ヨシ、勅定重カリシカバ、
 魚カラ涙ヲ押ヘテ鎌田次郎ニ宣ヒケルハ、綸言如此依之テ判
 官殿ヲ討奉ラバ、五逆罪ノ其一ツヲ犯スベシ、罪ニ恐テ宣旨
 ニ背カバ、忽違勅ノ者ト成スベシ、如何ニスベキト有シカバ、正清
 畏リテ申スニ、恐候ヘドモ、愚ナル事ヲ御定候モノ哉、私ノ合
 戦ニ討奉ラセ玉ハンコソ、其罪モ候ハンズレ、是ハ朝敵ト成
 玉ヘバ、終ニハ遁ルマジキ御身ナリ、縦ヒ御承ニテ候ハズトモ、
 時日ヲ廻ラスベキ御命ナラヌニトリテハ、御方ニ侍ラセ玉ヒナ
 ガラ、人手ニ掛テ御覽候ハンヨリ、同クハ御手ニ懸進ラセサ

セ玉ヒテ、後ノ御孝養ヲコソ、能々セサセ玉ハンズレ、何カ苦シ
 ク候ベキト申セバ、然ラバ汝計ラヘトテ、泣々内へ入玉フ、即
 鎌田入道ノ方へ忝リ、當時都ニハ平氏ノ輩ラ權威ヲ執リ、
 守殿ハ石ノ中ノ蛛トヤランノヤウニテ御座ハ、東国へ被下玉
 ヒ候ナリ、判官殿ハ先立テ奉ラントテ、御迎ニ進ラセラレ候
 トテ、車差寄タレバ、然ラバ今一度ハ幡へ忝リテ、御暇乞申
 ベカリシモノヲトテ、南ヲ伏拜ミテ、ヤガテ車ニ乗玉フ、七條
 朱雀ニ白木ノ輿ヲ昇居タリ、是ハ輿ヨリ乗移リ玉ハシ處ヲ
 討奉ラン支度ナリ、其時、泰野治郎延景、鎌田ニ向ヒテ申ケ

ルハ御辺ノ計ハカヒ誤レリ、人ノ身ハ一期ノ終リヲ以テ一大事トセリ、ソレヲ暗ヤ々ト殺シ奉ラシ事、無情侍リ、タゞ有リノマ、ニシラセ奉ラシ可キ被仰置ニ支モナドナカルベキト云ハバ、正清尤然ルベシ、物ヲ思ハセ進ラセジト存テ、カヤウニ討ラヒタレ、臣ニ我ガアヤマリナリト申ケレバ、延景マ井リテ、誠ニハ関東御下向ニテハ候バズ、守殿宣旨ヲ奉テ、正清太刀ニテ失ナヒマイラスベキニテ候、再三歎キ御申候ヒシカドモ、勅定重ク候間、カナク被申附候ト申タリシカバ、口惜キ事カナ、為義ホドノ者ヲ、タバカラズト討セヨカシ、縦ヒ綸言重クシテ、助ル

支コソ不叶氏ナド有リノ俣ニハ知ラセヌヅ、又誠ニ助ケントオモハシ、我身ニカヘテモ、ナドカ可キ不申宥、義朝ガ入道ヲ憑ニシテ来ラシニハ、為義ガ命ニ替テモ助ツ親ノヤウニ子ハ思ハヌ習ヒナレバ、義朝一人ガ罪ニアラス、只恨メシキハ此事ヲ、始ヨリナド知ラセヌヅトテ、念佛百返計リ唱ヘツ、更ニ命惜ム気色モナク、程ヘバ定テ、為義ガ頸斬見ントテ、雜人ナドモ立コムベシトクトクキレト宣玉ヘバ、鎌田次郎太刀ヲ抜テ後口ヘ廻リケルガ、相傳ノ主ノ頸キラシコト心憂クテ、涙ニ暗クラシテ、太刀ノ當アテ所モオボヘ子バ持タル太刀ヲ人ニ與ヘテ、終ニキラレ玉ヒケリ、

頸實檢ノ後義朝ニ賜ヒテ、可^キ孝養由被仰下ケレバ、正清
是ヲ受取テ、墓ヲ建壇ヲツキ、卒都婆大トヲ造リ立ラレ
テ、ヤウノノ孝養ヲゾ致サレケル、抑義朝ニ父ヲ斬セラレ
シ事、前代未聞ノ義ニアラスヤ、且朝家ノ御誤リ、且ハ其身
ノ不覺ナリ、勅命ニ背キガタキニ依テ是ヲ誅セバ、忠トヤ
セシ、信トヤ為シ、若忠也ト云フ、忠臣ハ孝子ノ門ニ求ムト
云ヘリ、モシマタ信ト云フ、信セバ義ニ近ク為ヨト云ヘリ、
義ヲ背ヒテ忠信ニ從ハシヤ、然レバ孝ヲ父ニトリ、忠ヲ君ニ
トル、モシ忠ヲ面ニシテ父ヲ殺サンハ、不孝ノ大逆、不義ノ

至極ナリ、サレバ百行ノ中ニハ、孝行ヲ以テ先トスト云ヒ、マタ
三千ノ刑ハ、不孝ヨリ大^{オホ}ヒナルハナシト云ヘリ、ソノ上大賢ノ孟
子ニ、喩ヲ以テ問テ曰ク、虞舜ノ天子タリシ時、其父瞽瞍人ヲ
殺害スル事アラシニ、時ノ大理ナレバ、皋陶是ヲ捕ヘテ罪ヲ
奏セシトキ、舜如何^{イカニ}シ玉フベキ、孝行無双ナルヲ以テ天下ヲ
保^{タも}テリ、政道正直ナルヲ舜ノ徳ト云ス、然ルニ正^{ただ}シク大犯ヲ致
セル者ヲバ、父トテ助ケバ、政道ヲケガサン、天下ハ一人ノ天
下ニアラス、若政道ヲ糺^{ただ}シテ刑ヲ行フ、又忽^{たち}ニ孝行ノ道
ニ背カン、明王ハ孝ヲ以テ天下ヲ治ム、然ラバ只父ヲ負^オニ位^イヲ

捨テ去ラマシトゾ判セル況ヤ義朝ノ身ニ於テヲヤ誠ニ助ケ
 ント思ハシニナド救ハザラン他人ニ仰附ラレシニハカクナキシダ
 イナリ誠ニ義ニソムケル故ニヤ無双ノ大忠ナリシカ共異ナル
 勸賞モナク詔句幾程ナクシテ身ヲ亡レケルコソ淺猿
 ケレ保元
 物語

義朝重代の兵ありて保元の勲功をそとれり
 侍りて父の首を切せり事大ひある咎あり古
 今もやび和漢も例あり勲功を申替るとも
 ろく退くともあざむ父を申せり道徳あり

名行ありてふればいづれ終り其身を全く捨て
 き滅びぬるとも天理あり凡かる事ハ其身の咎ハ
 然る事して朝家のおやまありて案ありあり
 けるぞ其頃名臣も數多有りあやまると通憲法師
 ちろび申行ひてあざむ諫め申さざれば大義
 を滅親といふことある石碯といふ人其子を殺した
 る事あり不忠の子を殺し理あり父不忠ありとも
 子として親を殺すといふこと道理あり孟子にたとへ
 たりていふぞ舜の天子なるも時其父瞽瞍ひと

殺事のありむと、時の大理あり、臯陶もくちらぶ、
舜ハいふ為玉ふべきといふ、舜ハ位を捨て父を負てを
去まるとあり、大賢の教あれば、忠孝の道あらされてお
もろく侍り、保元平治よりあつ、天下みよひて武
用さるるよ、王位軽くありぬいまで、太平の世こそよ
め、名行の破るふよむる事とぞ見え侍る、神皇正統記

嗚呼親房之論甚當矣、余每讀至為義言、
義朝若託我而來、吾必當換吾命以救之、
未嘗不廢卷而歎也、義朝於是乎可謂喪

人心之至而罪實通于天矣、鎌田正清阿
意飾非、主臣淪胥、以陷于弑君父之大惡、
吁、亦可醜矣、今井兼平、後木曾暴逆、不能
強諫、相與為亂賊之黨、事雖不同、然其罪
一也、野間之變、粟津之亡、其尔遲矣、至於
親房之論、最後一節、不復于太平之世、由
名行之壞、則卓絶之見、至當之言、識者有
感云、

右淺見先生編輯之忠孝類說清獻遺言講義教予書寫為來示言如口義未淨寫散脫或有之故不許徧見如遠藤氏者悉見之可也其他教戒捧捫之坊者詳于手帖然此書也出洛於元祿癸未臘月廿二日而到破舍於室永元甲申五月廿二日是以六月朔始採筆寫口義同月十四日書寫終焉同月某日又始筆書類說同月廿日書寫終焉蓋味其概畧先生悼道學之衰之微凜然而顯於

文辭之表其卓絕之才志壹之思信神儒之先生而識先生者其唯遺言也歟

門人 土別鳥羽篤好謹識

忠孝類說 大尾

稱呼辨

名分之學不明則事無體制網紀隨壞凡所以理國正家制行修辭皆苟焉而已矣且若近世諸稱呼訛謬尤多如我國都

桓武天皇由南都遷于今山城愛宕郡命號曰平安城以後

歷朝因之未嘗有革則是今日通行不易之定稱也然世作詞章裁簡牘者率稱曰洛陽曰長安雖承襲之久全無意義周成王都河南洛水

之北同號曰洛陽猶汾陽河陽之類特異國一
處之地名而歷代仍之耳至於長安則宜如可
通稱也然是亦關西都號本鄉名而漢高祖取
以名咸陽與洛陽相對實有方地可指豈可以
此稱於別都耶况我

國乎其他如以桃花銅駝稱條路之類皆假託
失實殊非名分之正也近來又有居鴨川之東
西稱為河東河西及江東江西者居堀川東西
者亦然大抵其鄉里宅舍邊才有一水便要以

江河表之比擬異國地名甚可鄙矣尤可笑者
凡書諸國號必以陽字帶之如拱津為拱陽播
磨為播陽筑紫為紫陽大坂為坂陽其餘皆然
其意以為是則美稱也殊不知陽本對陰乃山
南水北之謂如華陽岳陽及前所云洛陽汾陽
之類而無山水可指標者則雖大都通津亦不
可以陽呼也山北水南謂之陰亦同其他疎妄
如以唐名稱官名稱國守為諸候以假名為諱
以實名為字呼學者為秀才之屬不可勝數而

至於相稱為君為公則又可謂無忌憚矣又有
 約省姓名摸倣異國人或直以伯某仲某自命
 字者與彼被深衣蒙幅巾以奉祭祀之類為同
 一流而其亂名實異文軌孰甚乎是此皆始乎
 陋儒俗學而其無稽無識銜竒駭俗之所為而
 卒教舉世之人承認踵誤不知自犯名教之罪
 焉可悲也夫淺見安正謹識



明治三年仲夏新刻

尾州名古屋本町	永樂屋東西郎
大坂心齋橋北太良町	河内屋喜兵衛
安堂寺町	敦賀屋彦七
京御幸町姉小路上	菱屋孫兵衛
西条御旅町	田中屋次兵衛
三条通寺町西	吉野屋甚助
江州大津京町	本屋伊助
八甲	錢屋六次郎
中町通丸屋丁	本屋宗治郎

發行書林

